

51. 土木作業

今日では土木工事は土建会社が請負うが、かつては溜池や堤防の修理など村民の義務として総出で進める工事があり、土木技術が村方に蓄積され伝承されてきた。

◆クロクワ（黒鋤）

〈A〉は大型の風呂鋤で、刃先幅 14cm、鋤平の長さ 40.5cm、柄の長さ 95cm。大阪近辺ではオオグワ（大鋤）ともオワリグワ（尾張鋤）とも呼ぶもの。摂津市域では土木工事（千里丘東）・牛のすき残しを耕す（鳥飼上）・あぜぬりなどに使った。

◆オウコ（杓＝天秤棒）

〈B〉は天秤棒で、下の皿籠と同家からの寄贈。長さ 151cm、広い部分の幅 6.5cm。天秤棒は 1 家で何本か持っていた。鳥飼中の N 家から寄贈された天秤棒は 9 本で、その大きさは最大 188cm で、150cm、140cm 台が各 1 本、130cm 台 5 本、最小は 127cm である。

◆サラカゴ（皿籠）

〈C〉は皿籠。天秤棒の前後にかけて土を運んだ。直径 53cm、厚さ 5.3cm。2 枚セット。

◆つるはし？

〈D〉は資料カードには無名。刃長 28cm、柄 99cm。

◆土羽うち

〈E〉は資料カードに「土羽打ち：堤防の法面に芝を切って植え、上から叩いていく」とメモがある。板幅 43cm、板高 26cm、柄 81cm。

◆村で伝えるクロクワの技術

クロクワ、オワリは村の中でせんぐり伝えていく技術。歳いった経験者がクロクワでサラカゴに土を盛ってグッと押さえ、若いもんがオウコで運ぶ。長い距離の運搬はオウコのリレー。背中合わせになって肩から肩へ移す。東海道線は田の底の土を取って運んだ。

山田の村の池はもちろん、個人の池も修理はお互いの出会い。大きなヤカンのお茶とコウコ（沢庵漬け）でもてなす。1 人 10 日の義務の場合、不足の人は日当を払い、余分に出た人が受け取る。それは棟梁が計算して取り仕切る。

◆池底や堤に粘土を貼る

池のクロクワは、3～5 人が並んでヨイショヨイショと声をかけて、5 人の場合 3 人が振り上げ 2 人が叩くというように交互に叩いていく。粘土を 5 寸置いて 3 遍叩けば水が漏れない。また 5 寸おいて締める。また池の堤は波で削られ痩せてワンドになる。粘土をはりつけてハラガチで叩いて締めた。ハラガチは 6 尺柄の槌（千里丘東の I 氏）。

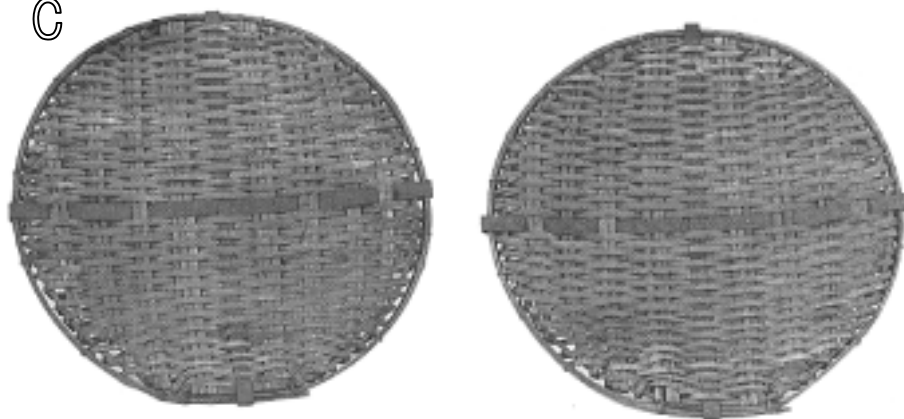
A



B



C



D



E

